

特115

813

讚 佛 歌

本派本願寺教學課指定
平安中學校多々良教師校閱

兒童用



始



42115
813

讚佛歌

目次

第七	今日の日曜	七
第六	朝のうた	六
第五	嬉しい事	五
第四	御親の聲	四
第三	樂しや樂しや	三
第二	なさけのふかい御佛	二
第一	御佛の子供	一

第八	光	八
第九	清けき光	九
第十	慈悲なる御親	一〇
第十一	紅百合	一一
第十二	長閑けき春	一二
第十三	來れ子供	一三
第十四	報恩の歌	一四
第十五	清きまどゐ	一五
第十六	今日の幸	一六
第十七	幸ある我	一七

はしがき

- 一 本集は佛教日曜學校兒童用として歌詞のみを編集したるものなり。
- 一 本集の歌詞は道友黒瀬・掬月・道元・堀川等の諸兄の寄贈にかかゝるもの多し、記して深く感謝す。
- 一 本集歌詞の曲譜は次で發刊せんとする教師用の讚佛歌にあり。彼此對照せられたし。

大正四年八月三日

編者誌す

次 目

第十八 佛の御手……………一八
 第十九 我が心……………一九
 第二十 佛のすがた……………二〇
 第二十一 樂しきまどゐ……………二一
 第二十二 罪の浮世……………二二
 第二十三 さかえの國……………二三
 第二十四 永劫の希望……………二四
 第二十五 御法の春……………二五
 第二十六 救の聲……………二六
 第二十七 擁護の恵……………二七

第二十八 汚れし我……………二八
 第二十九 弘誓の御手……………二九
 第三十 救の船……………三〇
 第三十一 たよれ佛に……………三一
 第三十二 眞實の佛……………三二
 第三十三 我世のすまゐ……………三三
 第三十四 御佛の心……………三四
 第三十五 小春の光……………三五
 第三十六 秋のあつまり……………三六
 第三十七 夕の歌……………三七

次 目

第三十八 佛は慈悲よ……………三八
 第三十九 行けよ來よ……………三九
 第四十 花祭の歌……………四〇
 第四十 同上つゞき……………四一
 第四十一 宗祖降誕會の歌(男子用)……………四二
 第四十二 宗祖降誕會の歌(女子用)……………四三
 第四十三 報恩講の歌……………四四
 第四十四 新の歳……………四五
 第四十五 歳の暮……………四六
 第四十六 誕生の歌……………四七

第四十七 送別の歌……………四八
 第四十八 葬式の歌……………四九
 第四十九 噫亡き友……………五〇
 第五十 追吊の歌……………五一

一 第
御佛の子供

一
みほごけさまの
おごもは
かあーちゃん
ねーちゃん
わたしらよ

二
しなぬほごけに
たれがる
かあーちゃん
ねーちゃん
わたしらよ

佛みいかふのけさな

一 何處から人は、生れ來て

何處へ歸つて行くのだらう

罪には悪い報ある

正しい理のあるものを

二 人には、たんご悪い事

あるが習ご聞いて居る

私もきれいに、あらためて

今より善い子ごなりませう

三 お阿彌陀様は正直な

者をは讃めて下さるの

二 わるい事をばせぬ様に

今日から私は誓ひます

四 温情の深い御佛は

きつご私の成長を

佛の國から夜晝ご

守り祈つて下さるの

五 太陽様も星さまも

私のすきな犬までも

私を守るお使ご

思へば悪作ができません

やし樂やし樂

一 樂しや樂しや佛の子供

山にも野邊にも御親の慈悲は

溢れて匂へり 盛の花ご

三 樂しや樂しや佛の子供

織りなす錦の木葉の蔭に

御親の恵の 果實は満てり

二 樂しや樂しや佛の子供

日盛 緑の滴る蔭に

御親の慰 清水は湧けり

四 樂しや樂しや佛の子供

悪魔を拂ふか 木枯吹けば

恵の白雪 我が世を飾る

御親の聲

一 御親の聲が 高らかに

聞える様な 心持

嬉しい事が 昨日今日

私のめぐりに 寄つて来る

朝は御親に 起されて

夜は御親に 守られる

三 佛の心 頂いて

今は嬉しい 夜晝を

楽しく暮す 私等は

御親のからだ 我からだ

二 風の響も 鳥歌も

流の音も 慕はしく

一 嬉しい事は世の中に

澤山あれぞ み佛に

かはゆがられる私ほご

仕合者は ほかにない

二 少さい時から み佛の

おじひのうちに 育てられ

悲しい時も 面白く

つらい時にも なくさめて

三 よい事すれば ほめ給ひ

わるい所は氣をつけて

四 おほきくなるのを悦んで

いつも守つて 下される

智慧も力も ないけれど

慈悲の佛の お名前を

稱へる時は 私でも

えらいお人ご 同じ事

こんな嬉しい 私等は

よその子供ご ちがふもの

お友だちごも 仲善くし

楽しい日をは 送りませう

事いし鐘

第六
朝のうた

一 東の山は紫の

着物きかへて、きげんよく

今朝もをかしく私等の

朝寝するのを笑うてる

二 お庭の松に巢をかけた

雀の子さへ昨日から

朝早くから起きて来て

みんなを起してまはつてる

三 佛の慈悲の、おねまゆる

心持よく寝て居ても

四

雀の子には、まけられぬ

早く起きよと喚びたまふ

佛の御聲さきながら

朝寝する子は人でない

お慈悲な佛の子となつた

私は今から、きをつけて

五

鳥や獸に、まけぬやう

お慈悲の聲に起き出でて

朝寝する子の、いましめに

きつこなるやう致しませう

第七
今日の日曜日

一 今日(けふ)は楽しい日曜日

待つて居ましたお休よ

姉さん早く起きまして

裏のお庭へ出かけませう

三

姉さん赤い花を採り

御佛様の瓶に挿し

みんな一處に父さんの

後について参りませう

二 小山を越えて花畑

お池の水を汲み上げて

坊が育てた菊の花

今朝は珍らし眞盛

四

白いお花は坊が持ち

晝の日曜学校の

机の上に飾り立て

嬉しいお話 聞いて来う

一 晴れたる夜半の空を見よ

數限なき星かけは

きらりきらりご輝けご

大きな月は唯一つ

三 私の罪は深けれご

私の咎は重けれご

佛の慈悲が強いから

心にかかる事もない

二 十方諸佛はましませご

私を救ひたまはるは

廣い世界に唯一人

御名も尊い阿彌陀佛

四 友よ疾く來よ我が園の

青葉の蔭で御佛の

尊い御名を稱へつつ

光仰いで遊ばうよ

一 千草に宿る 玉の露は

御空の月に光得たり

汚れし胸も父の慈悲の

宿れば清けき光満つよ

嬉しき父の 教なくば

いかでか我等は安さを得ん

三 花咲く園に 鳴く小鳥は

幸に満ちたる春を歌ふ

我等も涼しき聲を上げて

佛の恵を讃へまつらん

二 潮のごこく寄する、なやみ

あらゆる罪は我が身にあり

一 天にも地にも

恵の光も

到らぬ限なく

我が世を照す

(折返シ)
仰げや佛慈悲なる御親

二 光に我等は

罪答消えて

常誓の生命に

悶は解けぬ

三 岸にも沖にも

救の御船

迷の海原

行きかひ繁し

四 御聲に我等は

雲霧晴れて

輝く希望に

憂は絶えぬ

一 赤きを誇る紅百合も

露にかわくぞ憐なる

流るゝ水や走る雲

暫時も此處に止まらず

三 たごへば上に炎もえ

低きに水のつく如く

御恵深き御佛は

罪ある我を救ひます

二 水底深き琵琶湖さへ

乾きて盡くる時あるを

短き人の世にありて

道求めざる愚さよ

四 迷の里を今や去り

永劫の光と生命得て

涼しき風の野に立てば

空行く月のおもしろや

長閑けき春は法の花
咲き香ふなる野に出でて
讚歌うたふ百鳥の
聲たのもしく聞く我等

二 黄金を熔かす夏の日
救の船に身を任せ
吹き来る風を帆に受けて
涼しき岸に行く我等

三 法の風吹く秋の夜の
迷暗の雲も拂はれて
高く御空に澄みわたる
眞如の月を見る我等

四 冬は凍れる罪あれど
さのみなげかじ御佛の
心ばかりに、ほだされて
慈悲の御國に入る我等

一 來れ子供
御親の下に
力なきを 歎ける人は
彌陀を持たぬ あはれ孤兒

二 來れ子供
御親の下に
死にを恐れ 悲む人は
彌陀の國を 知らざる盲目

三 來れ子供
御親の下に
智慧のなきに 惑へる人は
彌陀の御名を 稱へぬ啞よ

四 來れ子供
御親の下に
彌陀は絶えず 恵と慈悲に
満たせ給はん 我等の希望

一 いざ友よ もろごもに

我が悦を聲あけて

御親の慈悲に答へつつ

楽しき今日を歌はなん

二 遇ひがたく聞きがたき

誠の父にめぐり遇ひ

溢るる慈悲の聲を聞く

あな幸多きこの集團

三 いくむかし長き夜も

御親を知らで迷ひてし

我等は今や我が父の

御國に歸る子となりぬ

四 黒暗の人の世も

御親の御名に光得て

常世の春の長閑けさを

絶えぬ恵に榮行かん

一 清きまきとる いざ友來よ

我等は皆慈悲の子よ

愛みの花咲く園

御親はこく待ちませり

(折返シ)

救はるゝ嬉しさよ

いざとく來よ此の集團

二 怒り憎み 愛し嫌ふ

幾多の咎 多き罪

かくて終に沈む我等

導きます御手たふこ

三 行く手暗き よみちの旅

絶えず守る父の慈悲

何に喩へん 此の悦

いざや讚へん 我が幸を

一 誠こもる御佛の
御名ご聞かば、いざ思へ
罪に惱む我がための
救の道 はや成るこ

三 惠み溢る御佛の
御すがた見ば、ごく仰げ
よるべあらぬ我が爲の
永劫の御親ましますこ

三 榮みてる御佛の
國ご聞かば、やよ慕へ
力よわき我がための
終の宿 はや成るこ

四 清き法の慈悲の庭
御國を譽め御名を呼び
御顔拜む今日の幸
いざや讚へん大御徳

一 小鳥の聲に夢さめて
慈悲の御親を拜しつつ
樂しき今日を 思ふこき
幸ある我を歌ふなり

三 夕樂しきまごゐして
智慧ご慈悲ごにまもらるる
嬉しき此の身 思ふこき
幸ある我を歌ふなり

二 學の庭に、はた家に
おのがつこめをなしこげて
佛の惠 思ふこき
幸ある我を歌ふなり

四 げに幸なりや幸なりや
憂へ悲む人の世に
樂しき慈悲に育ちつつ
幸ある我を歌ふなり

佛の御手

一 佛のみに
我等は引かれ
樂しき國に
いざや行かなん

(折返シ)

ああ御佛
ああ御佛
ああ御佛
我を愛す

二 我等の罪も
佛の御手に
まかせまつれば
我が世は安し

三 いざ我が友よ
手を取りあひて
佛のをしへ
共に聞かなん

我が心

一 我等が心奥深く
持てる宿世の罪咎は
父の御聲によりて今
あごかたもなく消えにけり

二 いにし世よりも吾をせめし
幾多の悪魔汚しも

父の御名にていまは又
ゆくへも見えず失せにけり

三 惱み煩ふ吾が道は
今御光にひらかれぬ
憂きに悶えし世は今ぞ
盡きぬ望にかがやける

一世の暗深しこ、歎くなかれ

世の浪高しこ、かこつなかれ

御名をば稱ふる父の子等は

慈悲の翼もて、かくまひ給ふ

二もし世の海嘯の激しからば

御名に取りつきて遊ぎ渡れ

暗は深くこも御名を呼べば

永劫の御光ぞ、かがやくなる

三我等が稱ふる慈悲の御名は

父なる佛の、みすがたなり

稱へよ稱へよ父の御名を

稱へて佛の慈悲に答へん

一樂しや清き此のまごゐ

榮の花は永劫に咲き

生命の泉 絶えず湧き

御親は慈悲の御手のべて

呼びます御聲さやかなり

二樂しや清き此のまごゐ

けがれし罪はここに消え

底なき痛 ここに癒え

此上なき幸を身に受けて

永劫の國行、子となりぬ

三樂しや清き此のまごゐ

悦び勇み聲あげて

佛のめぐみ讃へばや

妙の御光 ほがらかに

かがやく此處の此の庭に

第二十二 罪の浮世

一 罪の浮世と思ひし我
今御光に照されては
浮雲ごはに拂ひ盡し
清き月見る心地ぞする

(折返シ)

ああ嬉しや
佛は慈悲の
我が父母

二 此の世の幸を祈りし我
今御聲にてかへり見れば
我等が願ふ、すべては皆
げに御佛のたまものなり

三 かくて佛の慈悲の御手に
すがりし兒等は今はすでに
清き御國の愛子なり
共に樂き幸ぞ受くる

第三十二 かさのえの國

一 いざ疾くはらから來り集ひ
救の御親を仰ぎ見よや
みすがた尊く、ゑまひ清く
恵にかがやき慈悲にかをる

二 妙なる光は我が世てらし
いごし兒いごし兒何に惱む
親こそこなれ急き來よご
罪の子呼びます御聲さやか

三 浮世の旅路に弱き我等
光に勇みつ聲にたちて
仰ぎつ佛にたよるせつな
くすしき力を永劫に得たり

四 になひて惱みし罪の重荷
おろせば喜胸にあふれ
歌ひつ佛の召しのままに
ごごしへさかえの國に進む

一 嬉しや、妙なる

佛の恵

我が世に溢れ

我身にあま

二 嬉しや、か弱く

罪ある我等

恵に永劫の

力を得たり

三 嬉しや、さやけき

佛の御聲

心に聞え

胸にぞ響く

四 嬉しや、はるけき

我が世の旅路

御聲に永劫の

希望を得たり

一 山にも野邊にもおりなす錦

照り添ふをりから聖人は降り

傳へし佛の妙なる法に

永久我が世は春こそなれる

二 此處より溢るる恵の水は

萎びし草木に又なき生命

ここより聞ゆる救の聲は

三 星霜移れど移らぬ春よ

聖人は世を去り六百五十

年月ふれども御法はさかえ

み聲はさやかに流は清し

四 浮世の旅路に疲れし我等

さやけき御聲に呼びさまされつ

清けき流にけがれは消えて

佛のみ前に立つ子となりぬ

五 今日しも尊き御法のつごひ

大谷聖人の昔をしのび

同胞もろごも教のまゝに

佛のみ名もて此の春讚へん

一 争あそび

妬ねたみ

悲かなしみ

や

怒いかだ 悶もだえに、攻せめられて
逃にぐるすべなき罪つみの世よの
我わがは佛ぶつの、み手てにあり

三

少ちさき我わがも、み佛ぶつの

深ふかき恵めぐみに育たてられ
嬉うれしく勇ゆうむものなれば
かよわき我わがを悲かなまず

二

黒くろ雲くも起たれ、風かぜも吹ふけ
大おほ浪なみ起たれ、雨あめも降ふれ
今いまや何なにをか恐おそるべき
我わがは救すくの船ふねにあり

四

罪つみ咎とが深ふかき我わがなれど
救すくの聲こゑを聞ききしより
此この身みにあまる悦よろこびを
稱こゝろふる嬉うれし父ちちの御み名な

一

いごも嬉うれし慈じ悲ひの父ちち
弱よわき我わがを救すくひて
恵めぐみ満みてる光あかりもて
生いける限かぎり我わがを守まもり
影かげの如ごとく添そひ給たまふ
朝あさな朝あさな御み佛ぶつの
慈じ悲ひの聲こゑに起たり出いで
夕ゆふな夕ゆふな御み佛ぶつの
愛いとくしみの胸むねに眠ねる
實じつに樂たのしき、やすらぎや

三

勤いとしむ日ひも休やすむ夜よも
父ちちは共ともに居ゐまして
慰なぐさもて、はげましつ
且かつ暮くれわが力ちからこなり
護まもり給たまふ嬉うれしきよ
いいでや共ともに勤いとしまん
生いきては此この幸さい受け
死しなば父ちちの御み國くににて
永とこ劫くわくの生命いのち得える我わが等らぞ
つごめ、はげめ、いさ共に

一 汚れし我は何時救はれん

今にして今にして

我が手は萎へぬ、足爛れ
心亂れぬ、悲しき運命

三 法の光ぞ輝きわたる

人の世に人の世に

此の受けがたき人の世に
我しも生れて復活りけり

二 法悦やにはに胸に溢れぬ

ああ佛 ああ佛

尊き佛は、御手のへて
汚れし者を清め給ふ

四 集へはらから現の世にも

光あり 光あり

いざ疾く来よご呼び給ふ
救の御手に、頼りて歌へ

一 紫にほふ曉天を

輝さわたる金色の

朝日の影は暖く
無明の闇を照すなり

二 七百年のいにしへの

今日の此の日をみ佛は

我等の迷夢を醒さんご
日出づる國に出でましぬ

難思の旗を振りかざし
弘誓の御手をさしのべて
智眼はくらく障ある
罪人來よご呼び給ふ

四 萎める心の花咲かせ

盡さぬ生命を與へんご

朝は東、夕は西
南船北馬、九十年

五 金剛石は珠を鑽り

法の劍は罪を斷つ

恵の光、のさかにて
心の闇は破れたり

ここはぎまつる快楽音
胸に響きて血潮わく
ああ諸人よ聲上げて
幸ある今日を歌はずや

一 うき世の岸に立ち見れば

あな恐しき罪の海

あなおぞましき怨の風

逆巻く波は虎と吠え

荒ふる風は龍ごまひ

雨さへ降りて氣もうつら

二 救の船に乗り見れば

げに静かなる慈悲の海

げに心地よき船の走

なさけの重波よせかへし

めぐみの追風真帆にみち

大空はれて氣はのごが

一 恵に誠に

満ちたる御佛
我等を呼びますいざ行かん

二 罪答造りて

惱める我等は
佛にたよらで如何にせん

三 たよらば悪魔の

巷も安けく
物みな希望にかがやく

四 たよらば移ろふ

此の世も樂しく
いかでか恐れん死の門

五 たよりて佛の

み前に立つ時
心のけがれはあごなし

六 世に又あらめや

かほごの悦
何かは願はん此のほか

一 御園みそのに匂におへる花はなの下もとに

疾とく來きて眺ながめよ妙たふの姿すがた

散ちりては空ひらしきもこの梢しげ

盛さかを過すぎなば悔くは盡つきじ

朝明あさあけ御光みひかり輝かがやく時とき

憐あはれや忽たちまち消きれて行ゆくよ

三 實けにこそ似にたれや花はなや露つゆや

人ひとの世よかくてぞ亡ほろぶるなる

ああ夢あうつつの、境さかいはなれ

眞實まことの佛ほとけの御手みてに、すがれ

二 静しづけき夕ゆふの草くさに宿やどる

清よけき白しろ露つゆ 玉たまつづれご

一 榮さかの光ひかり かがやきわたり

眞闇まやみをはらし、行衛ゆきゑを示しめす

あはれ尊たふき佛ほとけの恵めぐみ

あはれ嬉うれしき御親みおやのなさけ

三 佛ほとけの心こころ くまなく満みちりて

見みるさへ尊たふく聞きくさへ嬉うれし

あはれ樂たのしき我わがが世よの住居すまひ

二 救すくひの聲こゑは あまねく聞きえ

希のぞ望みをあたへ、力ちからとなれる

一 御佛の心は
 春の水の如し
 我の心の心は
 冬の夜の氷よ

(折返シ)

解けし水は
 菩提の河となり
 清き園の
 慈悲の池に概ぐ

二 御恵あたたかき
 慈悲の水によりて

我が心の氷
 あごなく解き給ふ

三 解けては我も亦

み佛の心よ
 迷へる罪の子を
 いざや呼び醒さん

一 吹く風涼しく御空は清く

照すやうららに小春の光

歌ふか妙なる佛の慈悲を

調も高しや蟲のこゑこゑ

二 御心こめつつ、孕み給ふ

佛のめぐみに生ひ立つ我等

心の赤誠はもみちに通ひ

希望の圓けさ月にも似たり

三 田の面の垂穂に、梢の果實

相に見するか行く手の幸を

諸聲たからか、いざ讚へよや

黄菊白菊 色添ふなかに

一 涼しき風 さやけき月

み空高く 世は清し

待ちに待ちし 木木の果

今ぞさかり いざ集へ

(折返し)

秋は來ぬ 野も山も

豊けき木の實 みちみてり

二 長閑けき日に 咲きし花は

其のかけだに 失せにしを

何時ともなく 忍びし實は

枝たわわに 美しく

三 雨や嵐 憂き日つみて

堪へ忍びし 花の木の

勝ちほこりし 小枝高く

結べる實の 雄雄しさよ

四 御親の手に 培はるる

我等も亦 花の身よ

御名の露の 惠受けて

美しき實を 穫り入れん

一 ねぐらに小鳥を家路に人を

送りし鐘の音消え行く邊

夕榮の空に希望をよせて

静かに御國をしのぶも嬉し

誘ふか我等を榮の園に

呼びます御聲の今聞ゆらし

三 外には誘惑 内には罪惡

満つなる憂き世も御親の下に

起き臥す我等は悦多し

御國の旅路は慎み行かん

二 あやなす大橋こなたに架り

輝く高殿かなたに聳え

ノ

一 ぬばたまの闇路

悪魔の、ちまた
迷へる我等を
呼びさまし給ふ

(折返シ)
佛は慈悲よ悦びつかへ

二 人の世の愛に

おぼれし我等
今御聲により
永劫に夢さむ

三 罪咎つくりて

うれへの、ふちに
沈める我等を
救ひ上げ給ふ

三え

四 我等御佛の

御恵なくば
苦しき此の世を
いかで、すごさん

一 こなたの教、あな貴さよ

愛しき我が子何さまよへる
其の道辿りこくこく行けや
よせくる悪魔飛來る征矢に
ごまらば汝そこなひやせん

波は高くも火ははげしくも
われよく汝、守りてあらん

三 此方は行けご彼方は來よご

來れよ行けご呼びます親の
慈悲の御聲に身は挾まれて
勇み、をどりて正道すくに
たのしき國に行くなる我等

二 かなたの招、あな嬉しさよ

かはゆき我子何ためらへる
此の道進みこくこく來よや

(一) 歌の祭花

一 お庭は櫻の花の幕

草の褥もやはらかに

今日は嬉しい花祭

佛の前で、私等は

唱歌うたうて遊びませう

二 皆さんおいでよ暖く

野草を渡る春風が

四〇

なかよく遊ぶ私等を

かはゆがられる御佛の

心のやうに吹いて来る

三 小枝に鳥がよい聲で

春のなさを歌つてる

いつしよに揃うて私等を

しよつちう降り下される

佛の慈悲を讃へませう

五 お庭は櫻の花の幕

草の褥も、やはらかに

今日は嬉しい花祭

佛の前で、私等は

唱歌うたうて遊びませう

四 花で此の世が、かざられる

嬉しい春を、つかさどる

お方がもしも、あるならば

此の世に一人なつかしい

お慈悲の高い阿彌陀様

(二) 歌の祭花

(用子男) 歌の會誕降祖宗

一 我等が父なる御佛は

自ら慈悲の使者となり

今日の善き日に生まれましぬ

祝へ祝へ

二 御年九歳の稚子櫻

散るや比叡の山あらし

我等が爲ごはいごほしや

讚へ讚へ

三 六角堂の夜半の夢

流も清き吉水の

御法は永劫に榮え行く

歌へ歌へ

四 我等罪ある人の子の

自ら力及ばじご

易き教を開きまます

來れ來れ

五 我等御親の手に依りて

今は救ひの船にあり

悦び勇みて父の名を

稱へ稱へ

(用子女) 歌の會誕降祖宗

一 七百年の古に

佛は此處に出でまして

救の御聲 ほがらかに

罪人來よご 呼び給ふ

凋める胸の花咲かせ

盡きぬ生命を與へんご

二 朝は東、夕は西

南船北馬、九十年

金剛石は珠を切り

彌陀の利劍、罪を斷つ

今や我等の夢さめて

只管仰ぐ光かな

三十四第
報恩講の歌

一 和歌の浦曲の 片男波の

寄かけよせかけ 歸る如く

我世に繁く 通ひ來り

み佛の慈悲 つたへなまし

二 一人居てしも 喜びなば

二人と思へ 二人にして

喜ぶをりは 三人なるぞ

その一人こそ 親鸞なれ

三 名残の御言 さやかにして

御名よぶ聲を 慕ひ來まし

四四

法の集團の 御座毎には

御影をうつし 臨み給ふ

若し夫れ知識の 教なくば

永久の闇路に 迷ひぬらん

御心こめし 君によりて

今し佛の 慈悲にあひぬ

喜たかく 胸にあふれ

嬉しさ深く 肝に銘ず

身は粉に 骨は碎きてしも

報いがたなき 君が御徳

第四十四第
新歳の歳

一 松の葉緑に梅が香清く

谷出し鶯聲ほがらかに

盡させぬ喜なべてに溢れ

新の歳をば迎ふる嬉し

二 霞めるみ空は希望に満ちて

長閑に吹き來る風心よく

昇るもうるはし朝日にてりて

ひらひら靡ける門邊の御旗

三 御親の恵に生ひ立つ我等

賜ひし信の新衣つけて

はらから諸共み前につごひ

めでたき此の日を祝ひまつらん

第五十四第
幕の歳

一 ながるる月日 馳せゆく歳

須臾をだにも 止るなく

明けぬ暮れぬと いひける程に

今年も早く すぎにけるよ

三 げに世は露か 稻妻かよ

水泡の如く 消えてゆけぞ

佛のめぐみ 永久に絶えず

望みかがやき 力あふる

二 來し方今に かへりみれば

只夢なりや まぼろしなり

思ひし事も なかばにして

罪ご惱の あこなる憂さ

四 佛の慈悲に たよれる身は

送迎に よろこびあり

受けし恵に こたへまつり

御名もて讃へん 歳の暮を

第六十四第
歌の生誕

一 さまよひ遠き 闇を出でて

愛し子生れぬ 救はるべく

慈悲の御教 満てる里に

三 やよ愛し子よ 仰げ慕へ

我等を求めて しばしだにも

やすき暇なき 慈悲の佛を

二 一度慈悲の 里に生れ

我等と睦まん 愛し子等は

慈悲の御親に 氣づかでは

四 み佛の慈悲に 孚まれて

我等の如くに 善兒となれ

ごもに睦まん やよ愛し子

七十四第
歌の別送

一 逢ふは別の始めとは

今にして初めて知るに
あらざれど
悲しきは

二 別離の際のころかな
ござまる我も
ゆく君も

みほごけの光の中に
育つ身ぞ
別れても
逢ふ日は常に
あるものを

三 淋しき際の一人居は

佛の名を
こなへて君を
偲ばまし
その折ぞ

四 定めなき世は
我やさき
君やさき
佛の御國に
生れなん

それまでは
かりの別離ぞ
いざやいざ

八十四第
歌の式葬

一 みほごけに抱かれて

君ゆきさぬ西の岸
なつかしきおもかげも
さえはてしかなしきよ

二 みほごけに抱かれて

君ゆきさぬ慈悲の國
みすくひを身にかけて
示しますかしこさよ

三 みほごけに抱かれて

君ゆきさぬ花の里
つきせざるたのしみに
笑み給ふうれしきよ

四 みほごけに抱かれて

君ゆきさぬ寶樓閣
うつくしきみほごけこ
なりまししたふごさよ

一 何處いづこに行きしか我がよき友は

情なさけにあふるる面影おもかげのこし

明暮あけくれむつびし我われをば捨てて

生先おひさ遙はるかに光榮はえ充みちけるを

さびしき月日つきひを誰たれご過すこさん

二 何處いづこよいづれよ我が亡なき友ともは

絶たえせず盡つきさせぬ名残なごりを止め

はかなき浮世うきよの汚けがれを離はなれ

榮さかのみ國くにの御親おやの下したに

み法のりの花はな愛めで待まちてぞあらん

三 ああ亡なき我が友ともあのよき友ともよ

胸むねさくばかりに悲かなしといへど

同おなじく佛ほとけの御子みこにてあれば

幽明うみやうはるかに國くにへだたれど

心こころのかよはぬ里さとこてあらじ

一 みほごけの御國みくにに往ゆきし

君きみをしも思おもひぞ出いづる

なつかしき君きみのおもかけ

佛ほとけの御名みな呼よべば浮うかみぬ

二 春はるの日の花はなの下したかけ

秋あきの夜の虫むしなく庭にはに

手てを取りて御親おやの慈悲あはれを

三 喜よろこびし君きみぞこひしき

今日けふはしも御法みぽうのむしろ

ひらきてぞ君きみをむかふる

いざ來きませみ靈たまよここに

殘のこりたる友ともぞつごへる

今日けふぞしるみ佛ほとけのこころ

先ま立ちてゆきし君きみこそ

みほごけの我われを導みちびく

ありがたき御使みつかひなりき

あなうれしみ佛ほとけの慈悲あはれの

我が胸むねに今いまぞみちぬる

いざ我等われらほごけの御名みなを

こなへてぞ君きみにむくいん

大正四年九月一日印刷
大正四年九月八日發行



不許
複製

編纂者

河名 識 雄

編纂者

龍田 秀 圓

發行者

清水 精 一郎

印刷所

引文社印刷所

發行所

京都市油小路
御前通上ル

興教書院

終